

豊子愷の仏教信仰における弘一法師と馬一浮

——『護生画集』を中心に——

大野 公賀

豊子愷の思想について考察する上で、仏教は重要な要素である。小論では、豊子愷の思想的集大成とも言うべき『護生画集』に焦点をあて、豊子愷の仏教信仰と弘一法師、馬一浮との関係について論ずる。尚『護生画集』全六集のうち、弘一大師が作成に関わったのは第一集および第二集のみであるため、小論では第二集までの期間を対象とする。

第一節 豊子愷の仏教帰依

まず豊子愷の仏教帰依の経緯について、弘一法師との関連から整理しておきたい。

五四新文化運動当時、知識人の間で美学を社会形成の手段とする芸術立国論が流行した。蔡元培の美育思想はその代表的なものであるが、それは同時に宗教の否定でもあった。蔡元培は1917年の北京神州学会の演説において、精神上の役割には「知識、意志、感情」の三つがあるが、そのうち「知識と意志」は科学と道徳の発展によって既に宗教の枠を離れており、残る「感情」も美感の育成によって宗教から離脱すると述べ、「美育を以て宗教に代える」ことを主張した¹⁾。豊子愷は1914年から1919年という五四新文化運動の時代を、浙江省における同運動の中心地であった浙江第一師範学校で過ごし、また蔡元培の教え子である李叔同（弘一法師）から芸術を学んだこともあって、豊の芸術観には五四新文化運動の影響が見られる。仏教帰依式を受ける以前、豊子愷は芸術による解脱を提唱していたが²⁾、これも蔡元培の「美育を以て宗教に代える」という主張の影響と言えよう。豊子愷がこのような芸術観および宗教観を離れ、仏教へと導かれて行ったのは、如何なる経緯によるのであろうか。

1926年春、豊子愷は夏丐尊と共に約六年ぶりに弘一法師を訪ね、次のような感慨に打たれた。

この十年來の心境を思い起こすと、(中略)あれこれ悩むことばかりで、ほとほと疲れ果てた。進むべき道を自分で決めていないばかりか、自分の状況を認識する余裕さえない。今回杭州に来て、弘一法師という明鏡の中に十年來の自分の姿があらまし映し出された。今回のことは、絶え間なく続く出鱈目な夢の中の欠伸のようなもので、ごちゃごちゃと乱れた夢のような世界をほんの暫くだが離れることが出来た。目をこすって考えてみると、それはこの儂い人生という路上にある一つの駅のようでもあり、私は数分間の静観を得ることができた³⁾。

1919年に浙江第一師範学校を卒業して以来、豊子愷は上海、東京、浙江省上虞そして再び上海と転々と場所を変え、忙しい日々を過ごしてきた。特に豊が弘一法師を訪れた1926年当時、豊は立達学園と開明書店の創設に深く関与し、立達学会の趣旨である「人格修養、学術研究、教育発展、社会改造」⁴⁾という理想の実現のために、まさに日々奔走していた。また大都市上海は故郷石門湾や上虞とは異なり、隣人との関係も希薄で⁵⁾、親しい者以外には互いに心を閉ざした「あまりにも緊張感に満ちた、あまりにも恐ろしい」世界であり⁶⁾、国内情勢は日ごとに不安を増していた。

しかし当時の豊子愷には立達学会の仲間がおり、理想の実現という夢があった。漫画の創作という点でも順調であった。鄭振鐸が『文学週報』1925年5月号に豊の絵を掲載して以来、豊子愷の漫画は評判を呼び、同年12月には文学週報社から最初の画集『子愷漫画』が出版された。同書には夏丐尊や鄭振鐸、朱自清、俞平伯らが序文や跋文を寄せている。反響も大きく、翌1926年には開明書店からも出版された。

1926年に豊子愷と夏丐尊が弘一法師を訪れてから、数ヶ月後に弘一法師が上海を訪れた。この折に豊子愷は、弘一法師が青春時代を過ごした場所を共に訪れ、また弘一法師の話聞くことで「人生の無常の哀しみ、そして縁の不可思議さ」に思いを馳せ、また「仏教に対する憧憬を少し味わった」。豊子愷にとって、弘一法師と過ごしたこの二日間は「非常に感情が高ぶり、厳粛」なものであったが、一方でこの間は「酒を飲むことが

出来なかったので、帰宅するや否や、家人に酒を買いに行かせた」と豊は記している⁷⁾。

仏教では、酒は本性を曇らせ、過失や犯罪の原因となるという考えから、不飲酒戒と称して飲酒を戒める。これは不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不妄語戒とともに、在俗信者の守るべき五戒の一つである。弘一法師が上海にいた間、豊子愷は弘一法師を尊重して酒を飲まなかったのであろう。上文のように、この折の不飲酒は一時的なもので、豊の仏教への思いがまだ「憧憬」程度であったことの表れと言えよう。しかし、そのわずか一年後、豊子愷は無常の思いに苛まれるようになり、それが仏教信仰の出発点となったようである⁸⁾。

豊子愷が無常の思いを抱くに至った当時、中国はどのような状況にあったのだろうか。1925年の五・三〇運動以降、中国国内では民族運動が全国的に急進化し、同時に列強と軍閥勢力による圧力も高まっていた。国民党内部の左右両派の対立も激化し、1926年7月には蒋介石の北伐戦争が開始された。北伐軍が長江流域に進出するに及び、同域に多くの利権や租界を持つ帝国列強との衝突は不可避のものとなった。1927年3月には英米による南京発砲事件が発生し、一般市民を含む数千人の中国人が殺傷された。これ以降、蒋介石は中国共産党および国民党左派との対決姿勢を明確化した。また政敵の王精衛の帰国による武漢国民政府との対立もあり、蒋介石は4月に上海クーデターを発動し、上海はじめ各地の労働者や共産党員の大虐殺を行ったのである。このような社会情勢の下、立達学園においても、豊子愷ら創設当初からの立達学会員に対する国民党右派の圧力が増大し、経費不足を理由に夏丐尊や豊子愷が主任を務める中文科や芸術科も停止された。

この頃、北伐軍によって軍閥の一掃された地域や都市部では、農民や労働者による民衆運動が嵐のような勢いで展開された。この労農運動のあまりの激化に対して、当初は祖国の独立と統一を熱望していた民族資本家や地主も次第に動揺を覚え、上海など大都市へ避難した。このため都市と農村、また都市内部での階級対立や経済格差が更に拡大した。

大都市では経済発展を背景に、一定の教育水準と経済力を有する市民階

級が出現し、都市生活を享受していた。豊子愷もこうした新興市民階級の一人として、上海の所謂モダンライフを満喫していたようである⁹⁾。また1927年当時、江湾の豊の自宅にはピアノが置かれており¹⁰⁾、豊子愷は当時、比較的余裕のある生活をおくっていたと思われる。創設当時の立達学園の教師の給与は一律二十元で、多くの教師は生活のために複数の学校での仕事を兼任していた¹¹⁾。豊子愷も立達学園以外に松江女子中学でも教壇に立っていたが、それ以上に豊の生活を支えたのは、開明書店などから出版した多くの著作や画集、雑誌に寄稿した原稿、また『愛の教育』『開明英語読本』などのベストセラーに添えた挿絵からの印税、そして開明書店の株式配当金であろう¹²⁾。

また当時、都市では国家および自分自身の将来に対する漠然とした恐怖や不安から、金銭を無上のものとして崇拜する拝金主義や、現在この一瞬が充実していれば、それでよいとする刹那主義が蔓延していた。豊子愷は市民の一人として都市の繁栄を享受する一方、金銭が人の思考や行動を支配することに嫌悪と空しさを覚えたのではないだろうか。

1927年秋、弘一法師は再び上海を訪れ、江湾立達学園の豊子愷宅に一ヶ月ほど逗留した。この折、キリスト教系の出版団体広学会の編集者である謝頌羔と豊子愷が友人であることを偶然に知った弘一法師は、豊に依頼して謝頌羔と面会した。この「敬虔な仏教徒と敬虔なキリスト教徒」が楽しみに談笑する様子を見て、豊子愷は「この世の“縁”の素晴らしさ」に思いを馳せている¹³⁾。この面談の様子を綴った豊の散文「縁」には、当時の政治的にも経済的にも混乱し、無秩序を極めていた上海とは思えぬような平和で清浄な世界が描かれている。現実世界が残酷であればある程、豊子愷はこの平和で清浄な世界にいつそう心を惹かれたことであろう。弘一法師の滞在中、豊は毎日夕刻の一時を法師と過ごし、言葉を交わすのを楽しみにしていた。当時、二人がどのような話をしたのか、豊は何も記していない。しかし、弘一法師との会話あるいは弘一法師の存在それ自体が、豊に何らかの宗教的感化を及ぼしたであろうことは想像に難くない。

豊子愷は1927年10月21日（旧暦9月26日）、三十歳の誕生日に弘一法師による仏教帰依式を受け、嬰行¹⁴⁾という法名を授けられた¹⁵⁾。仏教

帰依式を受けて以来、豊子愷は弘一法師の影響をいっそう強く受けるようになり、生活様式もすべて一変した。豊は弘一法師の指導に従い、毎日必ず礼拝をし、念仏を唱え¹⁶⁾、食生活も完全な菜食とし、不飲酒戒を守った。豊は帰依する以前から体質的な理由で豚肉や牛肉を口にしていなかったため、食生活の変化は問題ではなかった。しかし若い時から酒を好み、仏教に帰依する以前には「酒に迷った時もあった¹⁷⁾」豊にとって、不飲酒戒を守ることは決して容易ではなかった。だが不飲酒戒を忠実に守った結果、豊は1934年当時には戒律を守ることが楽しいと感じるようにさえなっている¹⁸⁾。

ところが抗戦期に書かれた『教師日記』には飲酒の様子がしばしば記されており、1938年頃には豊が既に飲酒を再開していたことがわかる¹⁹⁾。飲酒の再開すなわち不飲酒戒の中断は、何を意味しているのだろうか。それは豊子愷の仏教理解あるいは信仰それ自体の変化と言えないだろうか。これについては後述する。

第二節 『護生画集』第一集（1929年作成）

1927年秋の仏教帰依式と前後して、弘一法師と豊子愷は『護生画集』の作成を計画した。当初は一集のみの予定であったが、その後に全六集（計四百五十幅）とすることとなり、作成には1929年から1973年まで四十年以上の歳月がかかった。そのため内容も同書関係者も、集により異なっている。本節では『護生画集』第一集を中心に、同書作成の意図や経緯、社会的反響について述べたい。

『護生画集』第一集は1929年に開明書店の専用印刷所である美成印刷公司以て印刷され、開明書店や仏学書局、道德書局、華通書局、仏経流通所などで委託販売された。その作成費用は、弘一法師の熱心な信者であった上海在住の豪商、穆藕初の寄付に拠るところが大きい²⁰⁾。豊子愷と弘一法師は同書に版權を設けず、功德目的での複製を奨励したため、多くの寺院や仏教信徒が独自で印刷、出版した²¹⁾。同書は、一般民衆に向けて社会倫理や道德を説く目的で、明清に流行した無償刊行物「善書」の形態を模したものと云えよう。尚、初期の『護生画集』には「護生痛言」（李円浄述、

印光大師鑑定)という文章が付けられていた。これを記した李円浄(1900-1950)は上海在住の居士で、浄土宗の高僧である印光法師(1861-1940)の上海滞在の折には、常に側近く仕えていた。

前述のように弘一法師は1927年秋に上海の豊子愷を訪れ、豊宅に一ヶ月程逗留した。その折、弘一法師は豊子愷や李石曾、周予同、葉聖陶ら数名を連れて、新聞太平寺に滞在中の印光法師を訪問している²²⁾。印光法師と弘一法師の宗派は異なるが、弘一法師は「当代の優れた高僧のうち私が最も服膺するのは、ただ印光法師だけである」と述べるなど、印光法師を非常に崇敬していた²³⁾。豊子愷と李円浄が知り合ったのは、この印光法師訪問の折である。李円浄は豊子愷と弘一法師が『護生画集』の作成を計画していることを知ると、豊を「道を同じくする友」として遇し、「護生画」を多く描くよう励ました²⁴⁾。

弘一法師から豊子愷や李円浄への手紙の中で『護生画集』という名前が最初に出るのは、李円浄宛の1928年6月のものである。そこには『護生画集』に李円浄の「護生痛言」²⁵⁾を付属させるための案として『護生画集』という題の下に小文字で「文章あり」と付け加えることや、同書のための文を馬一浮に依頼することなどが記されている²⁶⁾。また1928年4月の豊子愷宛の手紙では、まず李円浄への返信について言及し、続けて「『戒殺画』の文字を書くことに賛同する旨が記されている²⁷⁾。以上から、豊子愷が仏教に帰依した1927年秋から翌春にかけて、弘一法師と豊子愷、李円浄の間で「戒殺(不殺生戒)」を題材とする画集の作成が考案されたと考えられる。1928年8月の弘一法師の手紙には『戒殺画集』という書名も記されており、最終的に『護生画集』という書名に確定するのは作成開始後のようである²⁸⁾。

弘一法師の弟子で、豊子愷の生涯の友として『護生画集』第四集以降の作成を支援した広洽法師(1900-1994)によると、『護生画集』第一集の作成にあたってはまず上海の豊子愷が絵を完成させ、当時温州にいた弘一法師に送付し、法師は絵の内容と形状に応じて題詞を配した²⁹⁾。弘一法師から豊子愷への1928年旧暦8月の手紙にも、李円浄と自分の考えは同じなので絵の選択は李円浄に任せ、決定後に自分に送付するようにと記され

ている³⁰⁾。弘一法師はまた豊子愷から送られてきた絵に対して、描き直しや画題の変更を度々命じている³¹⁾。以上から『護生画集』はまず豊子愷が絵を描き、それを李円浄が選択した後に弘一法師に送り、法師の指導にしたがって修正を加え、最後に弘一法師が題詞を付けるという手順が取られたようである。

弘一法師は本の装丁から用紙にいたるまで、以下のように細かな指示を与えている。

画集は中国製の紙に印刷すべきではあるが、表紙はやはり西洋風のデザインを用いて、二色または三色の色刷りにしてもよい。糸綴じの装丁について、日本風にするつもりである。つまり、このようなやり方は糸で結ぶことで、これは中国の仏教経典の装丁とは異なる。私の考えでは、同書はまだ仏教を信奉していない、近代的な学問を学んだ人々に重きを置くべきであり、広く寄贈したいと思う。(中略)したがって、表紙と装丁が極めて斬新で人の目を引く美しいものであれば、同書の内容を更に引き立たせ、読者の満足と喜びを引き起こすことが出来る。中味については中国製の紙を用いる。そうすれば、田舎でも同様に複製印刷することが出来るだろう³²⁾。

上記の手紙で、弘一法師は『護生画集』の読者として「まだ仏教を信奉していない、近代的な学問を学んだ人々」を想定しているが、これについて李円浄と豊子愷の二人に宛てた別の手紙には、また次のように記している。

案ずるに、この画集は大衆向けの芸術品として、優美で柔らかな情緒を以て、読者に物寂しさや哀しみ、哀れみを感じさせるべきで、芸術的価値を失ってはならない。もし紙面に残酷な気が満ち、しかも画題に「棺を開ける」「首吊り」「見せしめ」というような粗暴な文字が更に用いられると、読者に嫌悪感や不快感を与えることになるかもしれない。人の心を感動させるということから言えば、優美な作品は残酷な作品よりも更に深い感動を与えることができるかもしれない。残酷な作品は一時的に猛烈な刺激を与えうが、優美な作品ならばオリーブを食べるように、深く味わうことが出来るからである。(これは新教

育を受けたことのある者に対して言うのであって、一般人はあるいは残酷な作品をもっぱら好むかもしれない。) ³³⁾。

以上のように、弘一法師は『護生画集』の読者として「新派の知識階級(即ち高等小学校卒業以上程度)」で、また「仏の教えを信じず、仏教書を読むのを好まない人」を想定していた。また「愚夫愚婦および旧派の士農工商」を読者対象としなかったのは、彼らは『護生画集』を見ても「極めてわずかの利益しか得られず、褒め称えることなど決して出来ない」と考えたためである ³⁴⁾。弘一法師はまた「年長者や旧派の人間」には「新しい美術の知識」がなく、豊子愷の絵や自分の書道も「すべて俗人には理解観賞できない」ので、そのような人に『護生画集』を寄贈する必要はないとも述べている ³⁵⁾。

弘一法師のこのような新教育世代重視の発言には、清末以来の仏教界に対する差別や偏見が反映されている。1898年に張之洞が『勸学篇』を著すと、当時頹廢の極みにあった仏教寺院の土地や建物を没収して学校に転用し、教育を興そうという廟産興学の風潮が盛んになった。また清朝政府も1895年から1904年にかけて、宗教団体などの民間結社を禁じている。こうして仏教界への迫害が激化する中、危機意識を抱いた僧侶や仏教関係者らは仏教界の組織化や教育施設の設立に着手するようになった。楊文会の仏学研究会もこうした流れの中で1910年に創められたものである。また仏教会、仏教大同会、中華仏教協進会などが続々と結成され、1912年には中華仏教総会が結成されている。

ところが、辛亥革命後の新しい社会に仏教は不要であるという社会風潮を背景に、中華仏教総会は袁世凱政権によって1915年に活動停止とされた。その後、中華仏教界と改称して存続を図ったが、1918年には解散に追い込まれた。また五四新文化運動期には、迷信打倒運動や反宗教運動が展開され、各地で寺院に対する破壊活動が行われた。李叔同が出家したのは、まさにこのような時代であった。それまで西洋音楽や美術、演劇など新文化の第一人者として知られていた李叔同の出家が、当時の知識人に与えた衝撃と反発の大きさが想像できよう。

仏教に対する偏見と迫害はその後も続き、1927年には第二次廟産興学

の動きが興った。1929年には南京政府が「寺廟管理条例」を公布して廟産興学を支持するなど、仏教界の危機的状況は続いた³⁶⁾。仏教界への迫害は弘一法師の日常にまで影響を及ぼすようになり、日頃から法師の健康状態を心配する夏丐尊、経亨頤、豊子愷、劉質平らは浙江省白馬湖に弘一法師のための寓居「晚晴山房」を建設した³⁷⁾。

当時、庶民の間で一般に信仰されていた仏教は、豊子愷が幼少時に体験したような、仏教と道教、民間信仰が融合したもので、人々は仏教に現世の利益を求めていた。前述の弘一法師の言うところの「俗人」「一般人」「年長者や旧派の人間」とは、仏教を迷信的に信奉するだけの大衆であり、また仏教の本質を知ろうともせず、ただ迷信的であるとして仏教を否定し、排除しようとする知識人であった。

弘一法師による『護生画集』第一集跋文には「芸術を教化の方便とする」と記されている³⁸⁾。法師がその対象とした「新派の知識階級」とは、どのような人々を指していたのであろうか。これについて陳思和は、1930年代の中国の都市には「知識分子のエリート文化とエロティシズムを追求する野卑な文化との間には“高雅な”生活興趣を追求する大量の市民階層の文化が他に存在していた」と述べている³⁹⁾。豊子愷は、自分の漫画や散文の愛好者は「資本主義的な商業大都市」の「大衆」とであると認識していたが⁴⁰⁾、それは換言するならば都市の新興大衆あるいは中間市民階層である。彼らは一定の経済力と知識水準を有し、独自の文化や精神面での満足、即ち「“高雅な”生活興趣」を追求していた。『護生画集』の装丁や絵は弘一法師の指導を受けて豊子愷が担当したが、それは「新派の知識階級」を惹きつけるのに十分な魅力を有していたことであろう。

次に『護生画集』第一集の内容について述べたい。弘一法師は、前述の跋文にて同書は「人道主義を宗旨とする」と述べているが⁴¹⁾、ここで言う「人道主義」とは、具体的には不殺生と放生を指す。同書の最初の作品「衆生」には羊の群れと羊飼いが描かれているが、それに弘一法師は次のような題詞を配している。

これもまた衆生である 我とその実体は同じである

まさに慈悲の心を起こして 衆生の愚昧さを憐れむべきである

世の人々に普く勧める 放生と不殺生を
その肉を食さず すなわち愛することを謂う⁴²⁾

『護生画集』第一集に収められた五十幅の作品のうち、約八割が放生と不殺生に関するものである。しかもその多くが、包丁を手にした人間に泣きながら命乞いをする牛を描いた「命乞い」⁴³⁾、何も知らずに肉屋へ連れて行かれる羊を描いた「もしも羊が字を知っていたならば……」⁴⁴⁾ など、肉食を題材とした作品である。これらに配された題詞には無辜の動物の苦しみと哀しみ、そして慈悲心を持つことの重要さが説かれている。また「修羅」「肉」のように、屠殺場面そのものを描いた作品もある⁴⁵⁾。弘一法師はこの二作品の分かりやすさを好んだのか、豊子愷に対してこの二作を連続して収録し、題名も「修羅一」「修羅二」に変更するよう提案している⁴⁶⁾。

また放生・不殺生をテーマとした作品の中には、児童の遊戯や釣り、狩猟などを題材とした作品も数点含まれている。これらの作品の絵は穏やかであるが、その題詞に詠われるのは、他の作品と同様に生き物の苦しみと慈悲心である。

仏教では基本的に人為的殺戮を前提とする供犠とその食肉を禁止しており、不殺生戒の観点に立った場合、肉食は本来すべて禁じられるべきである。しかし在家信徒に対しては、動物の殺されるところを直接に見聞きしていない場合はその肉を「浄肉」と称するなど、一定の条件の下での肉食は認められる。この背景には、肉食という行為そのものよりも、動物に痛みや苦しみを与え、それを直接に見聞きすることの方が罪深いという考えがある。弘一法師も、南社時代の友人で仏教に関心を抱いていた姚石子(1891-1945)に宛てた手紙で、もし肉食をするのであれば、生きたまま買ってきて家で殺すのではなく、市場で処理してある肉を買ってくるべきであり、そうすれば肉食の罪はかなり軽減されると述べている⁴⁷⁾。釣りや狩猟は、自ら手を下して動物を殺害することであり、上述の仏教的観点からすると、その罪は重い。これらの作品に敢えて「暗殺」「おびき寄せて殺す」⁴⁸⁾などの恐ろしげなタイトルを付けたのは、読者の注意を特に喚起したいとの理由からであろうか。

不殺生と放生という考え方の根底には、すべての行為「業」は死後も潜在的な力として残存し、人の来世の善悪のあり方を規定するという因果応報思想が存在するが、これに基づいて弘一法師は通常の説教でもしばしば不殺生と放生を説いた。その一例として、弘一法師が1933年に泉州大開元寺で行った講演「放生と殺生の果報」の内容を見てみたい。法師は初めに、魚を逃した人が98歳まで長生きした話や、全財産をかけて放生をした人の病が全治した話、昼食に供される筍の鶏の命を救った人が後にその鶏に命を救われた話など、因果応報の例をいくつか挙げ、放生には「長生き」「病気治癒」「災難を逃れること」「子孫を得ること」「極楽往生」などの良い報いがあり、殺生にはその反対の「短命」「多病」「多難」「子孫のないこと」「地獄や餓鬼、畜生に墮ちること」などの悪い報いがあるので、聴衆は放生を行い、殺生を徹底的に改めると同時に、また周囲の人々にも殺生をしないよう勧めるべきだと述べている⁴⁹⁾。

弘一法師は因果応報という観念に基づいて、放生と不殺生を熱心に提唱したが、その背景には印光法師の教えがある。前述のように弘一法師は印光法師を非常に崇拝しており、姚石子への手紙でも印光法師は当世第一の高僧であり、品格は高潔で厳しいと絶賛している⁵⁰⁾。印光法師は本来、出家した僧侶を弟子としない主義であったが、『印光法師文鈔』に感動した弘一法師は弟子入りを哀願し、1924年にその願いが許され、弘一法師は浙江省普陀山で印光法師と七日間生活を共にした⁵¹⁾。弘一法師はその経験を基に、後に「略述印光大師の盛徳」と題する講演を行ったが、その中で印光大師が生涯で最も重んじたのは因果応報であると述べている⁵²⁾。弘一法師は崇敬する印光大師の教えに従い、自らも因果応報と不殺生を人々に説いたのである。

前述のように『護生画集』第一集には当初「護生痛言」（李円浄著述・印光法師鑑定）が付いていたが、その内容はまさに不殺生と放生の提唱である。この文章ならびに印光法師自身が記した「勸戒殺放生文序」には、不殺生と放生を勧める理由として、因果応報に加えて、輪廻転生する生き物はすべて、仏となる本性を有するという点において平等であるという考え（一切衆生悉有仏性）も記されている。印光法師は、次のように記して

いる。

そもそも人と諸々の生き物は、同じく天地の化育を受けて生じ、同じく血の通う肉体を賦与され、同じく靈妙なる智慧の性を有する。同じく生に執着し、死を恐れ、吉に向かい凶を避ける。一族の団欒は喜びであり、離散は悲しみである。恩恵を受ければ恩義を感じ、苦しみが残れば恨みを抱く。すべて悉く同じである。如何せん、諸々の生き物は過去世での悪しき業のために畜生に堕ちたのである。姿形は人と異なり、ものを言うこともできない。(中略)なぜその姿形が人と異なり、知力が劣るからといって、食べ物と見なしうるのか。自分の知力財力を以てそれを捕まえ、捌いて、焼いたり煮たりという極めて苦しい思いをさせ、いつとき自分の口を悦ばせ、腹を充たす喜びを為しうるのか⁵³⁾。

印光法師は続けて、以下の黄庭堅の詩を引用しているが、弘一法師も『護生画集』第一集でその詩の前半部分を引用している。

我が身と衆生の身

名は異なるが その実体は同じである

元々、同じく仏となる可能性をひめている

ただ姿形が異なるだけなのだ⁵⁴⁾

以上のように、印光法師や弘一法師の説く不殺生や放生、因果応報の根底には「一切衆生悉有仏性」という仏教哲理が存在する。しかし、仏教は非科学的であるという理由で否定されていた当時、弘一法師の名声や豊子愷の漫画を以てしても「新派の知識階級」に因果応報の思想を理解してもらうのは、決して容易なことではなかった。そこで彼らが利用したのが、当時ヨーロッパで流行していた肉食主義と動物愛護運動である。例えば「農夫と乳母」と題された絵に、弘一法師は次のような題詞を付けている。

昔、襦袢をしていた時を憶う	年老いた牛の乳を味わい啜ったことを
成長してから稲粱を食す	耕作の苦しみをお前に任せながら
この養育の恩を想うと	どうしてお前を忘れられようか
西洋の学者は	人道主義を唱え
年老いた牛の肉を食わず	無欲にして素食を楽しむ

この美風は素晴らしいことだ。これは百世に明らかにすべきである⁵⁵⁾

1934年に飛鵬芸術社から出版された『護生画集』や、『弘一大師法集』に収録された『護生画集』には世界保護動物日やロンドン菜食主義会、動物保護新運動などに関する記述が附録として付いている⁵⁶⁾。また初期の『護生画集』に付属していた李円浄の「護生痛言」では、健康面における肉食の害についても言及されている⁵⁷⁾。

『護生画集』第一集に対する社会的反響は大きく、特に仏教界では前述のように多様な版本が作られた。一説には十五版以上の種類があり、各版本の出版数は少ない場合で1,500冊、多い場合は5,000冊と言われている。また英訳本も数種類出版された⁵⁸⁾。しかし同書には非科学的な内容が多く、豊子愷や弘一法師らに対して批判的なグループからは格好の攻撃理由とされた⁵⁹⁾。

第三節 馬一浮

本節では弘一法師（李叔同）と豊子愷の仏教信仰に深い影響を及ぼした馬一浮との交流について述べたい。李叔同と馬一浮の交際は1902年から1903年にかけて、李叔同が上海の南洋公学に在学していた頃に始まり、その約十年後に李叔同が浙江第一師範学校に勤めるようになって再開された。馬一浮は儒学者として知られているが、仏教にも造詣が深く、李叔同が仏教について最初に教を請うたのは馬一浮である。1916年冬、李叔同は神経衰弱を治療する目的で、杭州虎跑寺で断食を体験した。虎跑寺で約二十日間を過ごした李叔同は僧侶の生活に憧れ、翌年からは菜食生活を始め、また『楞嚴経』『大乘起信論』などの仏典を大量に購入した。馬一浮は虎跑寺の雰囲気について李叔同から聞き及んでいたため、1918年1月に友人の彭遜之に静寂な場所を尋ねられた際、同寺を紹介した。彭は元々仏教に関心があった訳ではなく、あくまでも静寂を求めて虎跑寺を訪れたのであったが、雰囲気感化されたのか、数日後に出家する。この時期に李叔同も同じく虎跑寺を訪れ、彭遜之の出家に感動して、自らも出家を決意したのであった。

豊子愷が李叔同に伴われて初めて馬一浮を訪ねたのは、李叔同が1916

年冬に断食をしてから1918年1月に虎跑寺を訪れるまでの間のことである⁶⁰。この折、馬一浮と李叔同の間では「楞嚴」「円覚」「philosophy」などの言葉が交わされたが、内容の難解さに加えて、彼らが北方官話で話をしていたため、浙江省出身の豊子愷にはまったく理解できなかった⁶¹。

次に豊子愷が馬一浮を訪れたのは1931年のことで、弘一法師に頼まれた二つの用件を果たすためである。それは豊子愷が預かっていた印章を馬一浮に届け、また弘一法師の閉門蟄居および馬一浮への決別を伝えることであった。弘一法師は出家以前から神経衰弱に悩まされていたが、出家後は小康状態を保っていた。しかし前述のように1929年の南京政府の「寺廟管理条例」公布以降、僧侶および寺院への迫害が激化し、翌年には法師の逗留する寺院でも兵士の乱入や狼藉が度々みられるようになると、弘一法師は再び神経衰弱に苦しむようになった⁶²。そのため法師は1930年春、今後は閉門蟄居し、夏丏尊や豊子愷、劉質平ら一部の人間以外とは絶交する旨を夏丏尊に宣言した⁶³。

豊子愷は1931年に馬一浮を訪れた際、馬一浮の話がすべて理解でき、前回のような「木偶の苦痛」を味わうことはなかった。しかし、豊は当時「更に深い苦痛」に苦しめられていた。1929年に豊子愷は浙江第一師範学校時代の親友楊伯豪を失ったが、続けて次男の奇偉(1926生)が亡くなり、同年12月には義父が、また翌1930年2月には最愛の母鐘雲芳も逝去した。5歳で父を失った豊子愷にとって母は父親を兼ねた存在であり、その母の恩に何も報いていないという思いが、豊に「無常の悲憤と疑惑」をもたらした。また当時、豊子愷は漫画や随筆の印税、開明書店の株式配当などで相応の収入を得てはいたが、相次ぐ葬儀などから1929年末から1930年初にかけては経済的にも困窮していたようで、大江書舗の設立者で編集者の汪馥泉に二度ほど借金を依頼している⁶⁴。1930年秋には豊自身が腸チフスを患い、前年から勤めていた松江女子中学の教職および開明書店での『中学生』の編集の仕事も辞め、故郷の石門湾に近い嘉興へ転居した。

近親者の相次ぐ死や経済的困難、自らの病気、中でも特に母の死が豊子愷に与えた打撃は大きく、豊の心は「無常の悲憤と疑惑」に囚われていた。しかし、それを自力で解決することもならず、豊は「無気力状態」に陥っ

た。当時の様子を豊は次のように記している。

私は子どもの後について山や水辺にピクニックに行き、それで暫く苦痛を忘れることだけを願い、人生の根本的な問題に触れる話を聞くのをひたすら恐れた。悪いことと知りながらも、私は敢えて墮落した。しかしその墮落は、私の所属する社会のような環境ではうまく隠しおすことができた。なぜならば私は依然として、生活のために毎日いくばくか本を読み、原稿を書き、菜食と禁酒を何年も続け、芝居も見ず、また賭博もせず、道楽はせいぜい美麗印の煙草を毎日半缶吸い、砂糖菓子を少し食べ、玩具を買って子どもと遊ぶことぐらいいからである。私の所属する社会のような環境の人から見れば、このような人間は墮落していないどころか、実に前途有望なのであった。しかしM先生（馬一浮：大野注）の厳粛な人生は、私の墮落をはっきりと際立たせたのである⁶⁵。

当時の豊子愷の生活は、豊自身も記しているように、社会的には決して「墮落」と呼ぶようなものではなかったであろう。しかし豊は自分の精神的退廃を自覚しており、菜食や禁酒も形式的に続けているに過ぎなかった。

前述のように、弘一法師は豊子愷に菜食や禁酒、礼拝や念仏を奨励し、「念仏を唱えれば、無量の罪状を消し、無量の幸福を得ることが出来る」と述べている⁶⁶。弘一法師は自らの信奉していた南山律宗の特徴である戒律の護持を非常に重視しており、豊子愷にも仏典の研究よりも念仏や戒律の実践を優先するよう指導している。また弘一法師が念仏を重視した背景の一つとして、心酔していた印光法師の影響も無視できない。弘一法師は印光法師に関する講演で、念仏について次のように述べている。

大師（印光法師：大野注）は様々な仏法に精通しておられたが、ご自身が実行し、他人にも勧められたのは、念仏に専念することである。師の在家の弟子には、高等教育を受けた者や欧米に留学した者が多い。しかし師は決して彼らに仏法の哲理をお話になることはなく、それぞれ念仏に専心するよう、お勧めになるだけであった。弟子達も師のお言葉を聞いてまた皆がそれぞれ信じて実行し、決して念仏を軽視

し、疑いや疑問を持つようなことはない⁶⁷⁾。

一方、豊子愷は晩年に末子の豊新枚へ宛てた手紙で、仏教信仰のきっかけは『大乘起信論』に感銘を受けたことだと記しているように⁶⁸⁾、仏典自体に関心があり『護生画集』第一集の作成当ても『大乘起信論』の研究に時間を費やしていた。しかし弘一法師は豊子愷に同書の研究や、仏教と科学に関する本の翻訳は暫く止めても差し支えないと述べ、念仏の功德を繰り返し説いた⁶⁹⁾。豊子愷が弘一法師をどれほど尊敬し、敬慕していたとしても、仏教の思想性に魅了されていた豊にとって、弘一法師の説く「念仏を唱えれば、無量の罪状を消し、無量の幸福を得ることが出来る」という教えを全面的に受け入れるのは、かなりの困難を伴ったことであろう。

豊子愷は母の死後も菜食や禁酒、念仏などを続けてはいたが、それだけでは「無常の悲憤と疑惑」から解放されることはなかった。折しも、弘一法師が神経衰弱による閉門蟄居を宣言する。無常の思いに囚われ、一人苦しんでいた豊子愷は、弘一法師の宣言をどのような気持ちで聞いたのだろうか。弘一法師のように仏教を信奉し、あれほどまでに修行を重ねても、結局のところ人は救われないという思いを抱いただろうか。あるいは、念仏を唱え、菜食や禁酒をするだけでは、心の問題は解決できないという思いを改めて強くしただろうか。豊子愷が「人生の根本的な問題に触れる話」を避けていたのは、こうした混沌とした思いに、豊自身が耐え切れなかったからであろう。その様子を豊子愷は「心の中に“断ち切ることもできず、整えてもまた乱れる⁷⁰⁾” 一塊の糸があるかのような」ようだった。解きほぐすこともできず、紙に包みこんで胸にしまっておいた」と記している。

1931年に弘一法師の依頼によって馬一浮を訪ね、言葉を交わしたことで、豊子愷は久しぶりの解放感を覚えた。豊は翌日も馬一浮を訪問し、この「心の中の紙」を開いて見てもらおうと考えたが、結局訪問には至らなかった。豊子愷が自主的に馬一浮を訪れ「無常の火宅」から救出されるのは1933年のことである⁷¹⁾。この頃には豊子愷の悲しみも以前より和らぎ、生活も所謂「墮落」状態から抜け出しつつあった。豊は「“無常”に対して長期的な抵抗」をするために「無常」を題材とする『無常画集』の作成

を考案し、馬一浮を訪れて相談した。馬一浮は無常に関する仏典や詩を大量に挙げた後、翻然と「無常とは常である。無常を描くのは簡単だが、常は簡単には描けない」と豊子愷を論したのであった⁷²⁾。

馬一浮の「無常とは常である」という考えは、迷いの世界から隔絶されたところに真理の世界を求めめるのではなく、迷いの世界の只中で、衆生とともに働き続けるところに真理を見出そうとする菩薩思想に基づくものであろう。つまり衆生は無常の身として「煩惱」に苦しめられるが、無常を無常と悟ること、すなわち悟りの智慧「菩提」を得ることで、衆生は「仏」という常住の身になりうるという思想である。

豊子愷は仏教帰依式を受ける約一年前に、猫と鼠が家中を駆け回る凄まじい様子に怖れをなした子どもが、自分の懐に逃げ込んだ後に「一種の非常に厳粛で、また極めて安心した表情」を浮かべたのを見て、次のように記している。

私はこの世でも常々、猫と鼠の大戦のような脅しに出くわしており、懐を探して逃げ込みたいとも思う。しかし現在に至ってもまだ探し当てていないのだ!⁷³⁾

仏教帰依式を受けた当時の豊子愷にとって、仏教は恐怖に満ちた現実世界から逃避するための「懐」であったと考えられる。しかし、豊はその「懐」の内であっても、心の平安を得ることは出来ず、それを救ってくれたのが馬一浮の教えであった。豊は馬一浮の言葉によって「無常の火宅」から救出され、「無限の清々しさ」を感じる事ができたのである。

第四節 『護生画集』第二集（1939年作成）

1938年秋、弘一法師は『護生画集』の題詞の書きなおしと再版を決意した。当時、豊は桂林に疎開していたため、上海の仏教居士林図書館に保存してあった原稿本の絵を利用する予定であったが⁷⁴⁾、戦火で焼失したため、上海仏学書局が以前に出版した英訳版の絵が利用され⁷⁵⁾、1939年7月に同書局から再版された⁷⁶⁾。弘一法師はまたこれと並行して、豊子愷とともに『護生画集』第二集（全六十幅）の作成を開始した。この頃、法師と豊は今後十年ごとに『護生画集』続編を出版し、各集出版時の弘一法

師の年齢にあわせて収録作品数を第一集（全五十幅）から順次増やし、第六集（全百幅）まで続ける計画を立てた。弘一法師は『護生画集』が普及すれば、その功德と利益が世間に広まると考えていたのである⁷⁷⁾。

1939年旧暦9月、豊子愷は『護生画集』第二集の絵の草稿を完成させた。題詞は第一集と同様、弘一法師に配してもらう予定であった。しかし法師は病気のため文字の書写だけを担当することとなり、題詞の作成と選択は法師の指導の下、豊子愷が担当した⁷⁸⁾。当時、豊子愷と弘一法師はそれぞれ戦禍を逃れて江西省宜山と福建省泉州に疎開していたが、第二集の序言を執筆した夏丏尊は上海におり、第二集は1940年11月に上海の開明書店や仏学書局などから出版された。第二集には計六十の題詞が添えられているが、そのうち約半数が豊子愷の創作で、残りは古詩や出家前の李叔同が座右の書としていた『人譜』（明・劉宗周撰）などから取られている。

『護生画集』第二集は第一集と異なり、放生や戒殺を題材とする凄惨な作品はなく、衆生平等や万物共存を題材とした作品がほとんどである。例えば第二集の最初の作品「中秋同楽会」では中秋の名月を楽しむ人間と動物の姿が描かれ、その題詞には次のように記されている。

明るい月の光が万物を照らす
山川草木は清涼で、清らかである
すべての生き物が集り、和やかに楽しむ
共に月の靈なる輝きを浴び
あたかも樂園に登るかのようである⁷⁹⁾

第二集にはまた、動物の親子の愛情や動物同士の礼儀、動物の人間に対する忠誠などを題材とした作品が二十幅ほど含まれている。ここには、動物もまた心の働きや感情を持つ有情であり、「一切衆生悉有仏性」という意味で動物と人間は平等であるという考えが表現されている。

第二集のもう一つの特徴としては、戦争を題材とした作品が挙げられる。これらの作品では、戦争の悲惨さや残虐さを直接的に訴えるのではなく、万物の共存する理想世界を描くことで平和への願いを強調する。例えば「郊野の麒麟」には次のように述べられている。

麒麟がいる 麒麟がいる 郊野にいる

狼の額に馬の蹄をもち 踊躍に優れている
 生えた草を踏まず 虫を踏まず
 軍備を備えてはいるが侵略はしない⁸⁰⁾

これは『護生画集』第一集に収録された作品「!!!」の題詞に添えられた、弘一法師の以下の言葉に由来する。

幼い時に『詩経』「麟趾」章⁸¹⁾を読んだ。その注には次のように記されていた：

麒麟は仁獣にして、生えた草を踏まず、生きた虫を踏まず。

私はその文を読んで、深く感嘆した。

四十年来、未だ嘗て忘却していない⁸²⁾。

第二集の「郊野の麒麟」では、麒麟とそれを指差して微笑む子どもの姿が描かれているのに対し、第一集の「!!!」では、小さな蟻を今まさに踏みつけんとせんばかりの人間の足が大きく描かれている。同様な題材を扱いながら、第一集と第二集では内容も、読者に与える印象も完全に異なっている。

第一集と第二集の相異について、夏丏尊は『護生画集』第二集序言」で以下のように述べている。

二集（『護生画集』第一集・第二集：大野注）には十年の隔たりがあり、子愷の作風は次第に自然に近づき、弘一法師もまた、人も書も老成した。二集の内容と趣旨には更に大きな相違がある。第一集で取り上げた境地の多くは、人の心を痛ましめ、最後まで見るに忍びないものであったが、第二集では凄惨で罪過に満ちた場面は一つも無い。そこに表現されているのは、万物が何物にも束縛されることなく心のままに楽しむという趣旨と、互いに心が通じ合い共感しあうという姿で、本を開くと詩趣が満ち溢れ、これが勸善の書とは信じがたい程である。思うに第一集では虚妄を斥けること、即ち戒殺に重きが置かれていたが、第二集では正しい道理を明らかにすること、即ち護生に重きが置かれている。戒殺と護生は、同一の善行の両面である。戒殺が方便となって、はじめて護生が究境となるのである⁸³⁾。

こうした変化の要因の一つとして、豊子愷の戦争体験が挙げられる。豊

は「動物の臨死の恐怖」を身をもって体験することで、生の意味を更に深く理解し、また衆生平等の意識をいっそう強めたとも言えよう⁸⁴⁾。

次に、さらに決定的な要因として、馬一浮の教えが挙げられる。1938年11月に豊子愷は宜山の馬一浮から前述のように「豊子愷に贈る」という詩を贈られ、大いに啓発を受けた。詩にはこう詠われている。

昔は顧愷之がいた。人々は彼を才画癡の三絶と称した。

今は豊子愷がいる。その漫画の高才は四海を驚かせる。(中略)

人生の真相を描くことは出来ない(君はその画集に『人間相』と題した)(中略)

護生を描き、無常を描いた(『護生』『無常』は、いずれも君の画集の名である)(中略)

(華嚴の偈に云う、心は巧みな画師のようで、一切の現象を見事に表出する⁸⁵⁾。私が常々、君に言うように 三界にはただ心だけが存在する⁸⁶⁾、また即ち三界はただ画だけが存在する。(中略))

君は嘗てその画を『人間相』と題した。しかし実際には、現在の世は地獄同様である。

私は嘗て君に言った。画師の役目は、理想の美を以て現実の悪を正すことにある、と。

故に、君の画が天妙にして莊嚴な様相となることを願う。

彼を此に変え、大地の衆生を煩惱から菩提へと転じさせる。

即ち君の画境は必ずや一変し、菩提へと至るであろう⁸⁷⁾。

この詩を読んで感激した豊子愷は、日記に次のように記している。

私の画集『人間相』に描かれているのは、確かに地獄相であって、この世の相ではない。風刺が正道ではないことは自分でもわかっている。しかし巡り合わせが悪く、この末法の世にある。(中略)昔、弘一法師と居士林で護生画集を共に作成したことを思い出す。私が作成したものの多くは、世間の惨殺の相で、血が滴り落ち、惨たらしさのあまり見るに忍びないようなものであった。弘一法師は絵を見る度に眉をひそめて嘆息され、そうではないというお気持ちを示された。ただ「俯きて雀の巢を窺う⁸⁸⁾」、「松樹の音楽隊⁸⁹⁾」、「蛾を憐れみて

灯を点けず⁹⁰⁾」などの画だけは喜ばれ、賛嘆し満足の意を示された。思うに（弘一法師は：大野注）馬先生と同じお考えで、それはつまり「理想の美を以て現実の悪を正す」ということであった。しかし私は当時、若気の至りで自分の考えに固執しており、大衆の多くは無知蒙昧であるから、どうしても反面から描いて大衆の心を打たねばならず、また頭ごなしに一喝して彼らを警醒せねばならぬと考えていたのである。そのため残忍な絵の削除に同意しなかった。当時、弘一法師は私を叱責することもなく、成り行きのままにされた。そのため、現在の護生画集の半分は残忍な虐殺の相である。私はこの事を思い出しでは心が痛む。今、馬先生のお教えを得て、心は更に戚戚たる思いである⁹¹⁾。

弘一法師が『護生画集』第一集の作成にあたり、李円浄と豊子愷への手紙で「人の心を感動させるということから言えば、優美な作品は残酷な作品よりも更に深い感動を与えることができる。残酷な作品は一時的に猛烈な刺激を与えうるが、優美な作品には深い味わいがある」と論じたことは前述のとおりである⁹²⁾。この弘一法師の言葉について、坂元ひろ子は『護生画集』第一集の作成に関わった弘一法師・豊子愷・李円浄の「三人のなかではもっとも仏教的な悟りに近いところにいたはずの弘一法師こそ、むしろもっとも芸術家に近い境地にあったことがわかる」と記している⁹³⁾。しかし、上述の日記で豊子愷が述べているように、それは馬一浮と同じく「理想の美を以て現実の悪を正す」という考えによるものであり、「芸術家に近い境地」というよりも根底にはやはり「仏教的な悟り」があったのではないかと思う。

夏丏尊は上述の引用で、『護生画集』第二集には「万物が何物にも束縛されることなく心のままに楽しむという趣旨と、互いに心が通じ合い共感しあうという姿」が表現されていると述べている。優美な作品によって「人の心を感動させる」という、『護生画集』第一集作成にあたっての弘一法師の想いは第二集にいたってようやく具現化されたが、その背景として馬一浮の存在と豊子愷の思想的円熟が指摘できよう。

- 1) 蔡元培「以美育代宗教説」蔡元培著・中国蔡元培研究会編『蔡元培全集』第3巻, 浙江教育出版社, 1997年, 57-64頁。
- 2) 豊子愷「山水間的生活」豊陳宝・豊一吟編『豊子愷文集』第5巻, 浙江文芸出版社・浙江教育出版社, 1996年, 15頁。以下, 豊陳宝・豊一吟編『豊子愷文集』第1-4巻: 芸術巻1-4』『豊子愷文集』第5-7巻: 文学巻1-3』(浙江文芸出版社・浙江教育出版社, 1996年)からの引用は『豊文集』と略し, 巻数については第1巻-第7巻と表記する。
- 3) 豊子愷「法味」『一般』第1巻第2号(1926年10月)252-253頁。
- 4) 「立達学会及其事業」『一般』創刊号(1926年9月5日)。
- 5) 豊子愷「楼板」『豊文集』第5巻, 131頁。
- 6) 豊子愷「随感五則」『一般』第2巻第2号(1927年2月5日号), 263頁。
- 7) 豊子愷, 前掲「法味」260-261頁。
- 8) 邵洛羊「挑灯風雨夜 往時從頭説——懷念豊子愷先生和他的漫画」鐘桂松・葉瑜蓀編『写意豊子愷』杭州・浙江文芸出版社, 1998年, 69頁。
- 9) 豊子愷「修斐尔德百年祭過後」『豊文集』第1巻, 288頁, 「送阿宝出黄金時代」『豊文集』第5巻, 447-448頁, 前掲「法味」254頁, 「戎孝子和李居士」『豊文集』第6巻, 686頁等。
- 10) 豊一吟『瀟洒風神 我的父親豊子愷』華東師範大学出版社, 1998年, 100頁。
- 11) 同上, 91-93頁。
- 12) 同上, 109頁, 113-116頁。
- 13) 豊子愷「縁」『豊文集』第5巻, 154-156頁。
- 14) 嬰行: 「嬰^{よう}児^ぎ行」(慈悲の心で小善を行うこと)は『涅槃經』で定める仏教五行の一つ。また弘一法師は出家以前, 1916年に断食を行った際, 老子の『道德經』第十章にちなんで「李嬰」と自称。夏丐尊「弘一法師之出家」『平屋之輯』浙江人民出版社, 1983年, 246頁。
- 15) 豊子愷が仏教に帰依した年度については1926年, 1927年, 1928年の三つの説がある。これは, 弘一法師がこれらの年に上海を訪問し, 後半の二回は豊子愷宅に逗留したためである。現在では, 豊子愷が帰依を受けたのは1927年の豊の誕生日とするのが定説となっており, 本稿でも同日を帰依日とする。殷琦「豊子愷の皈依仏教及“縁縁堂”命名的時間考証」『中国現代文学研究叢刊』1987年第1期, 1987年2月, 249-251頁。
- 16) 釈弘一「致豊子愷 一〇」(1928年旧暦9月12日)釈弘一著・弘一大師全集編集委員会編『弘一大師全集』福建人民出版社, 1992年, 第8冊, 188頁。

- 17) 豊子愷『教師日記』万光書局, 1946年, 64頁。
- 18) 豊子愷「素食以後」『豊文集』第5巻, 400頁。
- 19) 豊子愷「教師日記」『宇宙風(乙刊)』第18期(1939年12月1日, 767頁)。
- 20) 林子青編著『弘一法師年譜』宗教文化出版社, 1995年, 118-120頁。
- 21) 以下の『護生画集』後付には「歓迎翻印」「歓迎重印」と印刷されている。
弘一法師題字・豊子愷作画『護生画集』光明社, 1930年(第二版)。同, 飛鵬
芸術社, 1934年(重印)。同, 中国保護動物会, 1934年(第三版)。
- 22) 葉聖陶「兩法師」『葉聖陶散文 甲集』成都・四川人民出版社, 1983年, 186-
190頁。
- 23) 积弘一「致王心湛 三」(1924年旧暦2月4日)前掲書『弘一大師全集』第8冊,
147頁。
- 24) 豊子愷「戒孝子和李居士」『豊文集』第6巻, 686頁。
- 25) 李円浄の「護生痛言」は単独でも出版されており、『護生画集』の豊子愷の絵が
挿絵として使用されている。李円浄著述, 印光法師鑑定『護生痛言』1930年(第
九版)。
- 26) 积弘一「致李円浄 一」(1928年6月19日)前掲書『弘一大師全集』第8冊,
194頁。
- 27) 积弘一「致豊子愷 三」(1928年4月19日)同上, 184頁。
- 28) 积弘一「致李円浄 二」(1928年8月3日)同上, 195頁。
- 29) 积広治『『護生画集』第六集序言』豊陳宝等編『豊子愷漫画全集』第11巻, 北京・
京華出版社, 1999年, 472頁。
- 30) 积弘一「致豊子愷 四」(1928年旧暦8月14日)前掲書『弘一大師全集』第8冊,
185頁。
- 31) 积弘一「致豊子愷 六・七・八・九・十」(1928年旧暦8月22日・旧暦8月24
日・旧暦8月26日・9月4日・旧暦9月12日)同上, 186-189頁。
- 32) 积弘一「致豊子愷 四」(1928年旧暦8月14日)同上, 185頁。
- 33) 积弘一「致李円浄 四」(1928年旧暦8月21日)同上, 196頁。
- 34) 积弘一「致豊子愷 一〇」(1928年旧暦9月12日)同上, 188-189頁。
- 35) 积弘一「致李円浄 一」(1928年6月19日)・「致李円浄 二」(1928年8月3日)
同上, 194-195頁。
- 36) 末木文美士・曹章祺『現代中国の仏教』平河出版社, 1996年, 30-31頁。
- 37) 「晚晴山房」は夏丐尊, 経亨頤, 豊子愷, 劉質平, 穆藕初, 朱鮮典, 周承德の七
名により建築された。彼らはまた夏丐尊を中心に「晚晴山房護法会」を結成し,
弘一法師の必要とする薬品や文房四宝, 地方行脚の費用等を負担した。弘一法

師は1929年旧暦8月27日に晩晴山房に移ったが、翌1930年1月以降は国民党兵士の乱入が続いたため法師が実際に「晩晴山房」に住んだ時間はそれほど長くない。釈弘一「致豊子愷 一一、一二」(1929年旧暦8月29日, 1930年5月), 「致夏丐尊 二〇、三四」(1930年正月晦日, 立春後一日) 前掲書『弘一大師全集』第8冊, 124頁, 128頁, 189頁。

- 38) 釈弘一「廻向偈」弘一法師題字・豊子愷作画『護生画集』光明社, 1930年, 102頁。
- 39) 陳思和「試論九〇年代文学的無名特徴及其当代性」章培恒・陳思和主編『開端与終結 現代文学史分期論集』上海復旦大学出版社, 2002年, 159頁。
- 40) 豊子愷「商業芸術」前掲書『豊文集』第3巻, 4頁。
- 41) 釈弘一, 前掲「廻向偈」102頁。
- 42) 「衆生」前掲書『豊子愷漫画全集』第5巻, 2001年, 2頁。
- 43) 「乞命」同上, 19頁。
- 44) 「倘使羊識字……」同上, 18頁。『大乘涅槃經』の「屠所の羊」が典故と考えられる。
- 45) 「修羅」「肉」前掲書『豊子愷漫画全集』第5巻, 2001年, 23, 35頁。
- 46) 釈弘一「致豊子愷 六」(1928年旧暦8月22日) 前掲書『弘一大師全集』第8冊, 186頁。「修羅一」は編集過程で一旦は削除されたが, 弘一法師がこの絵を気に入ったため最終的に収録された。尚, 最終的に題名や順番の変更はせず, もともとの「修羅」「肉」の題名で収録された。順番も連続していない。
- 47) 釈弘一「致姚石子」(1928年) 同上『弘一大師全集』第8冊, 207頁。
- 48) 「誘殺」「暗殺其二」前掲書『豊子愷漫画全集』第5巻, 2001年, 33頁, 15頁。
- 49) 釈弘一「放生与殺生之果報」癸酉(1933年: 大野注) 五月十五日在泉州大開元寺講, 釈弘一著・蔡念生彙編『弘一大師法集』(四), 新文豊出版公司, 1999年, 1730-1733頁。
- 50) 釈弘一「致姚石子」(1928年) 前掲書『弘一大師全集』第8冊, 205-207頁。
- 51) <http://www.wenyi.com/zhuanti/hongyi/nianbiao/1924.htm>: 「中国文芸 記念弘一法師誕辰一百二十周年專題」: 2009年2月13日参照。
- 52) 釈弘一「略述印光大師之盛徳 在泉州壇林福林寺念仏期講」前掲書『弘一大師法集』(三) 1654-1656頁。弘一法師はまた以下の講演でも, 印光法師の名を出して因果応報の重要性を説いている。釈弘一「普勸浄宗道侶兼持誦地藏經」同上, 1652頁。
- 53) 釈印光著述・張育英校注「『勸戒殺放生文』序」『印光法師文鈔(修訂版)』下巻, 宗教文化出版社, 2003年, 1353頁。

- 54) 「平等」前掲書『豊子愷漫画全集』第5巻, 2001年, 46頁。
- 55) 「農夫与乳母」同上, 20頁。
- 56) 『護生画集』飛鵬芸術社, 1934年。『護生画集』前掲書『弘一大師法集』(五) 2311-2314頁。
- 57) 李円浄著述・印光法師鑑定「護生痛言」前掲書『護生画集』17-25頁。
- 58) 「出版前言」沈慶均・楊小玲主編『護生画集』中国友誼出版社, 1999年, 3頁。
- 59) 柔石「二三 豊子愷君底飄然的態度」『萌芽月刊』第1巻第4期, 1930年, 239頁。曹聚仁との論争および周作人による『護生画集』批判については、それぞれ楊晧文「豊子愷と厨川白村 —— 『苦悶の象徴』の受容をめぐる」『日本中国学会報』第五十七集, 2005年, 209-225頁, 同「豊子愷と周作人」『言葉と文化の国際交流』名古屋大学大学院・国際言語文化研究科(言語文化研究叢書9), 2010年3月, 43-62頁に詳しい。
- 60) 弘一法師述・高勝進筆記「我在西湖出家的經過」, 积弘一「断食日志」前掲書『弘一大師全集』第8冊, 16-18頁, 13-16頁。夏丐尊, 前掲「弘一法師之出家」『平屋之輯』246-247頁。また李叔同の断食・出家の経緯, 馬一浮の影響等については坂元ひろ子『連鎖する中国近代の“知”』研文出版, 2009年, 107-328頁に詳しい。
- 61) 豊子愷, 前掲「陋巷」『豊文集』第5巻, 202-204頁。
- 62) 积弘一「致夏丐尊 一九」(1930年1月7日)前掲書『弘一大師全集』第8冊, 124頁。
- 63) 积弘一「致夏丐尊 二三」(1930年旧暦4月28日)同上, 125頁。
- 64) 豊子愷「致汪馥泉 一」(1929年10月17日), 「同 三」(1930年2月9日)『豊文集』第7巻, 167-169頁。
- 65) 豊子愷, 前掲「陋巷」『豊文集』第5巻, 204-205頁。
- 66) 积弘一「致豊子愷 一〇」(1928年旧暦9月12日)前掲書『弘一大師全集』第8冊, 188頁。
- 67) 积弘一, 前掲「略述印光大師之盛徳 在泉州壇林福林寺念仏期講」1656頁。
- 68) 豊子愷「致豊新枚, 沈綸 九二」(1971年6月27日)『豊文集』第7巻, 630頁。
- 69) 积弘一「致豊子愷 一〇」(1928年旧暦9月12日)前掲書『弘一大師全集』第8冊, 188頁。
- 70) 南唐後主李煜の詞『相见歡』の一節。豊子愷は同詞を題材に漫画も創作している。
- 71) 豊子愷, 前掲「陋巷」『豊文集』第5巻, 204-205頁。
- 72) 同上 205-206頁。

- 73) 豊子愷「子愷隨筆（五）」『一般』1927年2月号, 296頁。
- 74) 釈弘一「致李円浄 一七」（1939年）前掲書『弘一大師全集』第8冊, 202頁。
- 75) 釈弘一「致李円浄 一五」（1939年旧11月24日）同上, 202頁。
- 76) 釈弘一「致豊子愷 二一」（1939年7月3日）同上, 192頁。
- 77) 釈弘一「致豊子愷 二二」（1939年旧10月）同上, 192頁。釈弘一「致李円浄 一三」（1939年端陽後2日）同上, 201頁。
- 78) 豊子愷「『護生画集』第二集代跋」前掲書『豊子愷漫画全集』第11巻, 1999年, 457頁。李叔同「『護生画集』第二集題後」同上, 456頁。
- 79) 豊子愷「中秋同楽会」前掲書『豊子愷漫画全集』第5巻, 2001年, 54頁。
- 80) 豊子愷「麟在郊野」同上, 111頁。「麟在郊野」の出典は『荀子』哀公（第三十一）。
- 81) 『詩経国風』「周南 麟之趾」を指す。
- 82) 豊子愷「!!!」前掲書『豊子愷漫画全集』第5巻, 2001年, 10頁。
- 83) 夏吋尊「『護生画集』第二集序言」前掲書『豊子愷漫画全集』第11巻, 1999年, 453頁。
- 84) 李円浄「『護生画集』第二集跋」同上『豊子愷漫画全集』第11巻, 1999年, 458頁。
- 85) 『大方広仏華嚴経』巻第九「夜摩天宮菩薩説偈品第十六」の「唯心偈（6）：心は巧みな画家のようなもので、五陰（物質、感受、想念、意思、認識）を描きだし、一切の世界のうちに、すべてのものを造り出す」に由来。<http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/database.html>：大正新脩大藏経テキストデータベース『大方広佛華嚴経』（No.0278）09巻 0465c26-27：2009年2月13日参照。
- 86) 「三界唯一心」：『華嚴経』十地品の第六現前地の経文、特に八十華嚴の「三界所有、唯是一心」に由来。
- 87) 豊子愷、前掲「教師日記」『宇宙風（乙刊）』第19期（1938年11月14日）808-809頁。
- 88) 「雀巢可俯而窺」前掲書『豊子愷漫画全集』第5巻, 2001年, 31頁。題詞は『荀子・哀公篇』「烏鵲之巢可俯而窺」に由来。
- 89) 「種来松樹高於屋、借与春禽養子孫」：「松間的音楽隊」の題詞（明の葉唐夫の詩）。同上, 32頁。
- 90) 「憐蛾不点灯」：「拾遺」の題詞（宋・蘇軾の詩）。同上 44頁。
- 91) 豊子愷、前掲「教師日記」『宇宙風（乙刊）』第19期（1938年11月14日）809頁。
- 92) 釈弘一、前掲「致李円浄 四」（1928年旧暦8月21日）前掲書『弘一大師全集』第8冊, 196頁。
- 93) 坂元ひろ子、前掲書『連鎖する中国近代の“知”』研文出版, 2009年, 331頁。